

## 安全な水を世界中に

群馬県 安中市立松井田中学校 三年  
黛 菜々海

先日のことである。二年前から育てていたマリモが、瓶の中で茶色くガビガビに干からびていた。小さな丸い瓶には、入っていないなければならないはずの水が一滴も入っていないなかつたのだ。二年前、広告で見て一目惚れした私は、妹と一つずつほしいとおねだりして手に入れたマリモだ。それぞれに名前をつけて、最初の頃は毎日観察し、水が減っていたら丁寧に補充していた。言い訳になつてしまふが、やること、やりたいことがたくさんあつて、最近はマリモの存在すら忘れていたのだつた。コップ一杯ほどの小さな瓶の中で、多いとは言えない水であつても、マリモにとってはまさに命の水だつたのだ。

私たち人間の生活ではどうか。顔を洗う、歯磨きをする、トイレや洗濯など、飲料としてだけでなく、たくさんのお水を私たちは日々消費しているのだ。特に、コロナ禍となつてからは、手洗いの励行がかつてないほど叫ばれるようになった。そしてワクチンを接種した際には、とにかく水を飲むようにと、母に言われた。発熱時の水分補給は、干からびた身体を生き返らせる効果が抜群なのだそう。実際、固形物は受け付けられない発熱時に、水はごくごく飲めて、身体が楽になつた記憶がある。

このように、私たちの生活に欠くことのできない水であるが、その水がなくなつてしまつたらと想像したことはあるだろうか。

例えば、オーストラリアのある地域では雨水をためて洗濯に使っているそう。降水量が少ない上に、乾燥していることから慢性的な水不足なのだ。雨水をためるという工夫で、水資源を大切にしていることがわかる。サハラ砂漠以南のアフリカ諸国では、約三百万人もの子供が、毎日長い道のりを歩いて池や湖、井戸まで水を汲みに行っているという。中には八時間以上、片道四キロかけて水を汲みに行っている子供もいる。そんな子供たちは、水を汲むだけで一日の生活時間のほとんどを費やしていて、教育を受ける時間がない。私たちが学校で当然のように、体育の授業後に手を洗うがいをしている、その瞬間も家族の生活水を求めて長距離を歩く子供たちがいるということ、私たちがリアルに感じる必要があるだろう。水資源を輸入に頼っている国もある。シンガポールでは、自国で水を得ることが難しく、隣のマレーシアから水を買っている。外国から生活用水を買うとなれば、水の使い方に慎重にならざるを得ないだろう。私たち日本人にはない発想かもしれない。日本は島国ゆえに、流れている川はすべて自国の川となる。しかし、世界にはいくつもの国にまたがって流れている川、すなわち国際河川が二百六十もあり、そこで水の奪い合いが起こっていることも日本人はあまり知らないのではない。例えば、アフリカにあるナイル川は、エジプト、スーダン、エチオピアなど十か国にまたがって流れている。上流の国で川の水を大量に使うと、下流の国では水が不足してしまう。上流の国が水源を汚すと、下流の国では清潔な水が使えず生活に大きな支障が生じるのだ。このようなことから水戦争とよばれる国同士の摩擦が国際問題になつているのだ。

国は違えど、同じ地球に住む地球人として、私たち日本人も水問題に取り組んでいかなければならないだろう。SDG<sup>s</sup>の六番に「安全な水とトイレを世界中に」とある。日本の企業も実践に乗り出していることを知り、頼もしく、そして日本人として誇りに感じる。私たち個人でも、水を大切に思い、守っていく方法はあるはずだ。まずは、水がある生活を当たり前と思わないことだ。さらに、蛇口の水は、山や森から流れてきていることに思いをめぐらせれば、山や森の環境を守りたいと思うだろう。そして、日々の生活の中でも、顔を洗うとき、歯磨きをするとき、無駄な使い方をしていないかと、意識するだけでも違うだろう。暑くなつて、一杯の水をがぶ飲みするとき、ほんの少しでも、ありがたいという気持ちで頭をよぎるような生活をしていきたいと思う。

ガビガビに干からびてしまったマリモの続きだが、瓶いっぱいのお水を与えて三日ほどで、緑色のやわらかそうなふわふわがよみがえつてきた。まさに命の水だつた。